

トウトアンクアメン (ツタンカーメン) 王時代のエジプト

河合 望*

Nozomu KAWAI*

1 はじめに

我が国でツタンカーメン王の名で知られる、古代エジプト新王国時代第 18 王朝のトウトアンクアメン王は、今日最も有名な古代エジプト王である。しかし、1922 年 11 月 4 日に王墓が発見されるまでは、トウトアンクアメン王はほとんど無名の王であった。それまでは、父とされるアクエンアテン王が建設したアケトアテン（現在のアマルナ遺跡）から出土したトウトアンクアメン王の名前を記した指輪や、テーベ、カルナクのアメン大神殿から出土した所謂「信仰復興碑」という石碑などが知られていたにすぎなかったのである。20 世紀最大の考古学的発見とされたトウトアンクアメン王墓からは、王のミイラと共に当時の王の埋葬や生活の一端を示す豪華な副葬品が発見され、王の存在が確証されたが、トウトアンクアメン王とその時代については不明な点が多かった。しかし、20 世紀の後半から考古学的発掘調査によりトウトアンクアメン王時代の神殿や高官の墓が次第に明らかになり、古代エジプト史におけるトウトアンクアメン王の時代の位置付けが可能となったのである。そこで、筆者はトウトアンクアメン王時代のエジプトを博士学位論文の研究テーマに選び、同王の治世について考察を行なった¹。本稿では、博士論文の研究と最新の研究成果を踏まえて、トウトアンクアメン王の治世の概要を総説する。

* 金沢大学新学術創成研究機構

(Institute for Frontier Science Initiative, Kanazawa University, Japan)

1 Kawai, N., *Studies in the Reign of Tutankhamum*, Ph.D. dissertation, Department of Near Eastern Studies, Johns Hopkins University, 2005, UMI, Ann Arbor, 2006.

2 トウトアंकアメン王とは

古代エジプト史において、トウトアंकアメン王の存在があまり知られてなかった理由の1つとして、彼の名が後世の王名表に記されていないことがあげられる。第19王朝のセティ1世がアビドスの葬祭殿に残した王名表には、第18王朝のアメンヘテプ3世とホルエムヘブ王の間の王が削除されている²。すなわち、アクエンアテン王、スメンクカーラー王、ネフェルネフェルウアテン王、トウトアंकアメン王、アイ王のアマルナ時代の5人の王の名前が記されていない。これは、伝統的な多神教を否定し、アテン一信仰が導入されたアマルナ時代の記憶の抹殺によるものとされる。トウトアंकアメン王は、アメン神を中心とする伝統的な宗教の信仰復興を推進したと知られているが、アクエンアテン王との関わりで、歴史の記憶から抹殺されたとみられる。

トウトアंकアメン (*Twt-ḥm-Imn*) 王は、一般的にはツタンカーメン王の名で知られているが、彼の名前の意味は、「アメン神の生きる似姿」という意味である。しかし、彼の本来の名前は、トウトアंकアテン (*Twt-ḥm-Itn*)、すなわち「アテン神の生きる似姿」という意味である³。このような名前をつけられた王子は、おそらく王位後継者とみなされたのであろう。ところで、トウトアंकアメンは、王の誕生名の一部で、正式には、「トウトアंकアメン・ヘカイウヌウシェマウ (*ḥq3-Iwn-šmḥw*)」である。ヘカイウヌウシェマウは、「南のヘリオポリスの支配者」という意味で、南のヘリオポリス、すなわちテーベを指し、アメンヘテプ3世以前の王の形容辞に合わせて、テーベのアメン神への帰依を示したものである。この形容辞は、トウトアंकアテンからトウトアंकアメンに改名した時に付加された。

古代エジプトの王は即位時に、即位名という名前を持つが、トウトアंकアメン王の即位名は、「ネブケペルウラー (*Nb-ḥprw-Rḥ*)」であり、その意味は「ラーの出現の主」である。この名前は、トウトアंकアテン王として即位した時に得たものであり、アテン信仰においてはアテン神が太陽神ラーの異なる形で顕現したものと考えられ、伝統的なアメン信仰においてもアメン神はラー神と習合しているので問題とはならなかった。名前を改名していることからわかるように、トウトアंकアメン王は、アマルナ時代とその直後の古代エジプト史の一大画期に生きた人物であり、彼の生きた時代は極めて重要な時代だったのである。

3 エジプト新王国時代第18王朝と太陽神信仰

新王国時代第18王朝が樹立する前、エジプトは最初の異民族支配を経験した。いわゆるヒ

2 Cf. Redford, D. B., *Pharaonic King Lists, Annals and Day Books*, Mississauga, 1986.

3 トウトアंकアメン王の名前については、Eaton-Krauss, M., 'The Titulary of Tutankhamun', in Osing, J. and Dreyer, G. (eds.), *Forum und Mass. Beiträge zur Literatur, Sprache und Kunst des alten Ägypten*, Wiesbaden: Harrassowitz, 1987, pp. 110-23.

クソス（「異国の支配者」の意）によるエジプト支配である。彼らはシリア・パレスチナ系の支配者で、その先祖は中王国時代頃から徐々にエジプトに移住し、前 1600 年頃に独自の西アジア系の王朝をエジプト北部のデルタ地帯東部のアヴァリスに樹立し、エジプトのほぼ北半分とパレスチナ地域を支配していた。当時エジプトの南部の上エジプト地域にはテーベを中心とする第 17 王朝が存在し、最初はヒクソスの支配に従属していたが、国土解放の戦争を繰り返し、イアフメス王の治世にヒクソスの駆逐に成功し、第 18 王朝が樹立されたのである。エジプト全土は再びエジプト土着王朝によって支配され、それは本拠地であるテーベのアメン神の加護によって達成されたと考えられた。その後、第 18 王朝の歴代の王は西アジア方面やヌビア方面に繰り返し軍事遠征を行い、トトメス 3 世の治世頃にエジプトは古代オリエント世界で最大の国家となったのである。軍事遠征による戦利品は、テーベのアメン神殿に寄進され、エジプトの版図拡大とともに莫大な富がアメン神殿に蓄積された。また、当時の王の即位はアメン神の神託によるものであり、アメン神殿の莫大な富を背景にアメン神官が王権に影響を及ぼすようになった。ハトシェプスト女王やアメンヘテプ 3 世の記念建造物には、母がアメン神と交わって自らが誕生したという聖婚による王位の正当性が示されている⁴。

一方でアメンヘテプ 2 世の治世頃から古王国時代に隆盛した北のヘリオポリスの太陽神ラー（またはラー・ホルアクティ神）の信仰も強くなり、王権側がアメン神と距離を置くようになった。アメンヘテプ 2 世の後継者トトメス 4 世は、ギザの大スフィンクスの両足の間に「夢の碑文」を建てたが、そこには同王がラー・ホルアクティ神の姿の 1 つである大スフィンクスの神託によって即位したことが記され、アメン神の名は一言たりとも記されていない⁵。つまり、アメン神に対抗してラー・ホルアクティ神の信仰が徐々に強まってきたことを示唆する。

4 アテン信仰とアクエンアテン王

最近、テーベ西岸のアメンヘテプ 3 世葬祭殿址から出土した石碑には、アメンヘテプ 3 世が供物を捧げるハヤブサの頭を持つ太陽神ラー・ホルアクティがアテン神の「前期名」で記されている⁶。すなわち、これまでアメンヘテプ 3 世の息子アメンヘテプ 4 世が導入したとされたアテン神は、アメンヘテプ 3 世の治世末に現れたということになる。ただし、この時はまだ唯一神としてではなく、オシリス神と対になって描かれているので、単なる 1 柱の神であり、アメンヘテプ 4 世が初めて唯一神としたのである。

4 Naville, E., *The Temple of Deir El Bahari*. London, 1897, p. 16.; Brunner, H. *Die Gebyrt des Gottkönigs*, Wiesbaden, 1964.

5 Bryan, B. M., *The Reign of Thutmose IV*, Baltimore, 1991, pp. 144-156.

6 El-Asfar, A., Ösing, J. and Stadelmann, R., 'A Stela of Amenhotep III with a Hymn to Re-Horkahty and Osiris', *Annales du Service des Antiquites de L'Égypte*, Tomb. 86 (2012-13), Cairo, pp. 149-155.

アメンヘテプ3世の治世においては、アメン信仰を維持しつつも他の神々の崇拜も強化し、さらにセド祭（王位更新祭）を挙げることで、王自らの権力の強化を努めた。アメンヘテプ3世は、祝祭を通じて自らが地上における太陽神であることを強調したのである⁷。アメンヘテプ3世の死後、アメンヘテプ4世が即位すると、彼はラー・ホルアクティの聖堂をアメン神殿のあるカルナクに建設し、まもなくしてアメン神殿の東側にアテン神殿群を造営した。そして、治世第4年に中エジプトに新都アケトアテンの建設を宣言し、治世第6年までに名前をアメンヘテプ（「アメン神は満足する」の意）からアクエンアテン（「アテン神に有益なる者」の意）に改名した。アクエンアテン王は、改名とほぼ同時にアケトアテンへの遷都を施行し、唯一神アテンの信仰に帰依した。アクエンアテン王の王妃ネフェルトイティは、すでにカルナクに独自の宗教施設フウト・ベンベンを持っていたが、アメンヘテプ4世の改名と同時に新たな形容辞ネフェルネフェルウアテンを加え、新都アケトアテンでは王に匹敵する権力を持ったとされる⁸。

5 アマルナにおけるトウトアंकアテン王子

トウトアंकアテン王子の最古の資料は、中エジプトの主要都市であるヘルモポリスから出土した石灰岩製の浮彫ブロックである（図1）⁹。浮彫は、左側に名前が明瞭でない王女の名前が、右側にトウトアंक（ウ）アテン王子の名前が記されている。王女の名前のある銘文には、「王の身体の娘、彼に [愛されし者]、二国の主に大いに讃えられし者・・・アテン」とあり、王子の名前のある銘文には、「王の身体の息子、彼に愛されし者、トウトアंक（ウ）アテン」とある。これらの銘文が壁面のどのような場面に記されていたかは不明であるが、文字の方向が対になっているため、おそらく右側にトウトアंक（ウ）アテン王子の姿があり、左側に王女の姿が描かれていたのであろう。銘文から判断すると左側に記された王女は、アクエンアテン王の王女であることは間違いない。アテンの文字の位置が最後にあることから推測すると、後にトウトアंकアメン王の王妃となるアंकエスエンパアテンである可能性が高い。トウトアंक（ウ）アテン王子は、即位以前にアंकエスエンパアテンと婚姻関係にあった可能性も

7 Cf. Berman, L. M., 'Overview of Amenhotep III and His Reign,' in O'Connor, D. and Cline, E. (eds.), *Amenhotep III: Perspectives on His Reign*, Michigan, 1997, pp. 1-25.

8 アメンヘテプ4世（アクエンアテン）の治世初期については、Redford, D. B., 'Akhenaten: New Theories and Old Facts', *Bulletin of the American Schools of Oriental Research*, 369 (2013), pp. 9-34 を参照。

9 Hermopolis Block 831-VIII C and 56-VIII A, Van Dijk, J., 'The Noble Lady of Mitanni and Other Royal Favourites of the Eighteenth Dynasty', in Van Dijk (ed.), *Essays on Ancient Egypt in Honour of Herman te Velde*, Groningen, 1997, pp. 37-39, 45 (figs. 3a-b); Gabolde, M., 'La parenté de Toutankhamon', *Bulletin de la Société Française d'Égyptologie* 155 (2002), pp.32-48, fig. 7.

考えられる。

アクエンアテン王の王女は、アマルナの神殿、王宮、墓、ステラなどに頻りに描かれているが、王子の図像はほとんど知られていない。ガボルデは、王子と思われる図像がアマルナ王家の図像に描かれていることを指摘しているが¹⁰、そのほかにも王子と思われる図像が認められる¹¹。銘文が唯一存在しているのがトウトアंक（ウ）アテン王子のみなので、これらの王子の図像も彼を表現したものとするのが自然であろう。

6 アクエンアテン王の共同統治者：スメンクカーラーとネフェルネフェルウアテン

アクエンアテン王とトウトアंकアメン王の間には、少なくとも2人の王が存在していたと考えられる。王の比定については様々な見解があるが、私は2人の共同統治者が存在していたと考えている。1人はスメンクカーラーという名の男性の王で、もう1人はネフェルネフェルウアテンという名の女性の王である。研究者の中には2人の人物は同一人物であると考えている者もいる¹²。というのも2人の王とも同じ即位名「アंकケペルウラー」を持っており、アクエンアテン王の長女メリトアテンを王妃としたと考えられているからである。しかし、状況は単純ではない。1998年にガボルデは、ネフェルネフェルウアテンという名の王が女性であることを確証した¹³。ネフェルネフェルウアテン王のカルトウーシュ内に共に記された形容辞「アケト・エン・ヒ・エス (*3ht-n-hy=s*)」が「彼女の夫に有益なる者」という意味であるため、女性であることは明白である。この人物比定について、私は、ネフェルトイティ王妃がアクエンアテン王の治世第12年頃に他界したという推測を前提に、ガボルドのネフェルネフェルウアテン女王はアクエンアテン王の長女、メリトアテンとする説に与したが、2015年にベルギーのヴァン・デア・ペレがアクエンアテン王の治世第16年の日付のグラフィットにネフェルトイティ王妃の名前があることを発表したことで¹⁴、以前考えられていたようなネフェルトイティ

10 Gabolde, M., *Bulletin de la Société Française d'Égyptologie* 155 (2002), fig. 8.

11 Hanke, R., *Amarna-Reliefs aus Hermopolis*, Hildesheim, 1978, pl. 4, fig. 7.

12 アクエンアテン王の共同統治者および後継者に関する近年の議論については、以下を参照。
Gabolde, M., *D'Akhenaton à Toutánkhamoun*, Lyon and Paris, 1998; Dodson, A., 'Amarna Sunset: the late-Amarna succession revisited', in Ikram, S. and Dodson, A. (eds.), *Beyond the Horizon: Studies in Egyptian Art, Archaeology and History in Honor of Barry J. Kemp*, 2 vols, I, Cairo, pp. 29-43.; van der Perre, A., 'The Year 16 Graffito of Akhenaten in Dayr Abu Hinnis. A Contribution to the Study of the Later Years of Nefertiti', *Journal of Egyptian History* 7 (2014), pp. 67-108.; Allen, J. P., 'The Amarna Succession Revised', *Göttinger Miszellen* 249 (2016), pp. 9-13.

13 Gabolde, M., *D'Akhenaton à Toutánkhamoun*, Lyon and Paris, 1998, pp. 154-157.

14 Van der Perre, A., 'The Year 16 Graffito of Akhenaten in Dayr Abu Hinnis', *Journal of Egyptian History* 7 (2014), pp. 67-108.

王妃がアクエンアテン王の治世第12年頃に他界したとの説は改めなければならなくなるので、ネフェルネフェルウアテンという形容辞を持つネフェルトイティ王妃がアクエンアテン王の共同統治者となったとする説に同意する。現在ロンドン大学のピートリー・エジプト考古学博物館に収蔵されている、いわゆる「共同統治ステラ」(UC410) (図2)にはアクエンアテン王とネフェルウネフェルウアテン女王の名前が刻まれているが、ネフェルウネフェルウアテン女王の名前はネフェルトイティ王妃の名前を改ざんしたものであり、これはネフェルトイティ王妃がネフェルウネフェルウアテン女王になったと解釈できる¹⁵。ヘルモポリスから発見されたアマルナ由来の石灰岩製ブロックの中には、2人の王とアネクエスエンペアテン王女を表した浮彫があり、接合すると思われる銘文から2人のアクエンアテン王とネフェルネフェルウアテン女王であることが明らかである(図3)¹⁶。そして、近年アマルナで発掘調査が行われた高官ラーネフェルの邸宅の門の脇柱の碑文には、アクエンアテン王の名前ではなくネフェルネフェルウアテン女王の名前のみが刻まれており¹⁷、彼女がアマルナにおける最後の王であり、アクエンアテン王の死後に単独統治者になったと考えられる。また、ネフェルネフェルウアテン女王の名前はアマルナの北河岸王宮の壁画に描かれており、王宮の壁面に記されたアクエンアテン王以外の唯一の王名である¹⁸。

ネフェルネフェルウアテン女王の治世には、すでにアテン神を唯一神とする信仰から伝統的なアメン神を中心とする多神教に復興したことがわかる。テーベ西岸のパイリ墓(第139号墓)の壁面にはネフェルウネフェルウアテン女王の治世第3年の日付を持つグラフィトが残されており(図4)¹⁹、グラフィトを書いた人物はアメン神殿の神官で、オシリス神をはじめとする他の神々について言及していることから、トゥトアंकアメン王の即位以前に信仰復興が着手されていたことになる。

トゥトアंकアメン王墓の副葬品の中には、ネフェルネフェルウアテン女王に本来帰属する

15 Gabolde, M., *D'Akhenaton à Toutánkhamoun*, Lyon and Paris, 1998, pp. 162-166.

16 Hermopolis blocks (406-VIIA+826-VIIIA), Roeder, G., *Amarna Reliefs aus Hermopolis*, Hildesheim, 1969, pl. 10, 16.

17 Kemp, B. J. and Stevens, A., *Busy Lives at Amarna: Excavation in the Main City*, 2010, pp.119-127.

18 Weatherhead, F., *Amarna Palace Paintings*, London, 2007, p. 25g-259, Fig. 132.

19 Gardiner, A. H., 'The Graffito from the Tomb of Pere', *Journal of Egyptian Archaeology* 14 (1928), 10-11.

ものが多数含まれていることが知られている²⁰。代表的なものとして、王のカノポスの棺や胸飾などがあり、明らかにネフェルネフェルウアテン女王の名前がトウトアंकアメンの名前に書き換えられている（図5）²¹。このことは本来ネフェルネフェルウアテン女王のために用意されていた副葬品が実際に使われなかった。すなわち、彼女は後継者であるトウトアंकアメン王によって適切に埋葬されず、その副葬品は再利用されたと考えられる。リーヴスは、ネフェルネフェルウアテン女王は、トウトアंकアメン王墓の埋葬室の奥に埋葬されたという説を提示し²²、物理探査を実施したが、探査のデータの信憑性は低く、そのような空間が存在するかどうかは明らかではない。

7 トウトアंकアテン王の即位

トウトアंकアメン王の死亡年齢はミイラの人類学的な研究から判断して、18～19歳頃ということであり、王墓から出土したワイン壺に記された最も新しい日付の治世年が10年であることから、彼は8～9歳頃に即位したと考えられている。王妃は、アクエンアテン王の三女であるアंकエスエンパアテンである。トウトアंकアメン王墓から出土した有名な黄金の玉座は、即位時の状況を示唆する貴重な資料である（図6）。玉座の背板にはアテン神の円盤と放射状の光線の下にトウトアंकアメン王とアंकエスエンパアテン王妃の姿が描かれている。この部分の名前は改名されているが、玉座の他の部分にはトウトアंकアテンとアंकエスエンパアテンの名前が認められる。玉座は、即位時に王が使用したものと考えられ、当初はアテン信仰を維持していたことは明白である。従来、トウトアंकアメン王は、即位時にトウトアंकアテン（「アテン神の生きる似姿」の意）と名乗っていたことから、アマルナで即位したと考えられていたが、ファイアンス製の指輪以外に王の名前を記した王宮や神殿が存在しないため、トウトアंकアテン王はアマルナでは即位しなかった可能性が高い。テーベのカル

20 近年、リーヴスが、トウトアंकアメン王の黄金のマスクの耳朶に穴が空いていることから、本来はネフェルネフェルウアテン女王のマスクだったという説を提唱しており、さらにマスクの銘文にもネフェルネフェルウアテン女王名前がトウトアंकアメン王の名前に書き換えられていると主張している。しかしながら、最近トウトアंकアメン王墓の黄金のマスクの修復を行ったドイツの保存修復師クリスチャン・エックマンによれば、マスクの裏側にはネフェルネフェルウアテン女王の名前は確認されない。

21 Gabolde, M., 'Under deep starring Sky', in Brand, P. and Cooper, L. (eds), *Causing His Name to Live: Studies in Egyptian Epigraphy and History in Memory of William J. Murnane*, Leiden, 2009, pp. 109-188.; Allen, J. P., 'The Original Owner of Tutankhamun's Canopic Coffins' in Hawass, Z. and Wegner, J. H. (eds.), *Millions of Jubilees: Studies in Honor of David P. Silverman*, Cairo, 2010, pp. 27-41.

22 Reeves, N., *The Burial of Nefertiti ?*, London, 2015.

ナク神殿出土のトウトアंकアメン王の「信仰復興碑」(図7)には王がメンフィスの王宮に居たことが記されており、おそらく即位後アマルナからメンフィスに遷都し、カルナク神殿を復興しテーベを再び宗教の中心地としたのであろう。トウトアंकアテン王が、アメン神の信仰復興に着手したことが、現在ベルリン・エジプト博物館に収蔵されているステラから明らかである。ここでは、トウトアंकアテン王が、再生復活を象徴するロータスの花束をアメン神とムウト女神に捧げている(図8)²³。

8 テーベの王家の谷におけるアマルナ王家の再埋葬

トウトアंकアテン王は、アクエンアテン王が建設したアケトアテンの都を放棄したことで、アマルナの王墓に埋葬された王家の人物をテーベの王家の谷に再埋葬したようである。王家の谷のトウトアंकアメン王墓の付近にある、トウトアंकアメン王墓とほぼ同じ岩盤の高さから掘削された墓にアマルナの王家の人物が再埋葬された。現在王家の谷第55号墓(KV55)と呼ばれるこの墓には王とみられる男性の遺体が副葬品とともに発見された(図9)²⁴。通廊から発見された封泥にトウトアंकアテン(アメン)王の即位名が押されていることから、同王の治世の初期に再埋葬が行われたと考えられている。埋葬された男性の王は、顔面の一部が破壊された木棺の中から発見され、頭蓋骨の形質人類学的な分析からトウトアंकアメン王の頭蓋骨と非常に類似していることから、トウトアंकアメン王の親類と考えられてきた²⁵。また死亡推定年齢が18歳から22歳であることから²⁶、アクエンアテン王の共同統治者であったスメンクカーラー王の遺体と考えられていたが、ザヒ・ハワスを団長とするDNA鑑定によれば、この王の遺体とトウトアंकアメン王の遺体は親子関係を示し、死亡年齢が40代と推定されることから、アクエンアテン王の遺体であると指摘されている²⁷。しかしながら、王家の谷第55号墓の王の遺体の比定については、依然として研究者の間で見解の決着をみていない。王の遺体が入っていた金張りの木棺の王名の部分は削られているが、共伴した呪文レンガの銘文にはアクエンアテン王の即位名が記されていた。また、アクエンアテン王の第2王妃キヤの頭部を象ったカノポス壺が出土しているが、胴部に彫られた彼女の名前を記した碑文は完全に削

23 Erman, A., 'Geschichtliche Inschriften aus dem Berliner Museum, Aus der Ketzzeit', *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 38 (1900), pp. 112-114.

24 Davis, T. M., *The Tomb of Queen Tiye*, London, 1910.

25 Harrison, R. G. and Abdallah, A. B., 'The remain of Tutankhamun', *Antiquity* 46 (1972), pp. 8-14.

26 Germer, R., 'Die Mumie aus dem Sarg in 'KV 55'' in Grimm, A. and Schoske, S., *Das Geheimnis des Golden Sarges: Echnaton und das Ende der Amarnazeit*, München, 2001, 58-61.

27 Hawass, Z. H. et al., 'Ancestry and Pathology in King Tutankhamun's Family', *Journal of the American Medical Association*, 303.7 (2010), pp. 638-647.

られている（図 10）。削られた部分から本来の銘文を推定すると、最初は彼女の名前の部分だけが削られ、アクエンアテン王の名前のみが記されていたと推測されている²⁸。金張りの木棺の周囲を覆っていた厨子には、アメンヘテプ3世の王妃で、息子のアクエンアテン王の時代に延命し、アマルナの王墓に埋葬されたとみられるティイ王妃の図像が中心的主題になっており、おそらく本来はアマルナの王墓のティイ王妃の埋葬に使用されたものであろう（図 11）。ティイ王妃の背後には息子のアクエンアテン王の姿が描かれているが、図像と名前は削られている。王家の谷・西谷のアメンヘテプ3世王墓にはティイの名前が記されたシャブティ像が出土している。「王の母」と記された銘文から判断して、これらはアクエンアテン王の治世に製作されたものであり²⁹、トウトアंकアテン（アメン）王が、ティイ王妃をアメンヘテプ3世王墓に再埋葬した際に納められたと考えられるが、厨子はアメンヘテプ3世王墓に収まりきらなかったため、第55号墓の男性の王の埋葬に再利用されたのであろう。前述したように本来トウトアंकアメン王は、先代のネフェルウネフェルウアテン王を適切に埋葬する代わりに、アマルナの王墓に埋葬されたアクエンアテン王あるいはスメンクカーラー王とティイ王妃をテーベで再埋葬することによって第18王朝の正統な王であることを示すことを意図したのではないかと考えられる。

9 トウトアंकアメン王の信仰復興事業

トウトアंकアテン王はおそらく治世3年までにトウトアंकアメン王に完全に改名し、アंकエスエンパアテン王妃はアंकエスエンアメンに改名したと考えられている。おそらく治世4年の日付を持っていた「信仰復興碑」（図7）には、それまでに成し遂げられた信仰復興の事業が記されたものと考えられる³⁰。「信仰復興碑」によれば、トウトアंकアメン王は、アマルナ時代に閉鎖していた各地の神殿を再開させるだけでなく、各神殿でアクエンアテン王の治世に破壊された神殿や神像を修復し、新たに増築や神像などを製作させたという。また、アマルナ時代に王権に集中していた富をエジプト全土の神々の諸神殿に分配し、地方豪族の子弟から神官を任命したと記されている。また、別の碑文では、信仰の復興には莫大な費用を要し、トウトアंकアメン王の治世第8年には各地の神殿を復興するためにエジプト全土で租税

28 Gabolde, M., 'Under deep starring Sky', in Brand, P. and Cooper, L. (eds), *Causing His Name to Live: Studies in Egyptian Epigraphy and History in Memory of William J. Murnane*, Leiden, 2009, pp. 109-188.

29 Ziegler, Ch., 'Notes sur la Reine Tiy' in *Hommages à Jean Leclant*, Paris, 1993, pp. 531-548.

30 Bennet, J., 'The Restoration Stela of Tutankhamun', *Journal of Egyptian Archaeology* 25 (1939), pp. 8-25.

が取り立ていられたという記録がある³¹。このように文字史料からトウトアंकアメン王の復興事業は知られているが、以下では、実際の神殿などの記念建造物からみられる復興の様相を見ていく。

「信仰復興碑」に記されている復興事業は、特にアクエンアテン王の命による大規模な破壊を受けたテーベの神殿群において実施された。カルナク神殿では、アクエンアテン王が東隣に造営したアテン神殿群の解体が始まり、神殿の壁面でアマルナ時代に削られたアメン神やムト女神の図像は修復され、第6塔門の壁面にはトウトアंकアメン王の修復碑文が残されている³²。

アメン神殿とムウト神殿を結ぶ参道の両側には、アクエンアテン王の治世に同王とネフェルトイティ王妃の顔を持つスフィンクスがあったが、トウトアंकアメン王はそれらの顔の部分をアメン神の聖獣である牡羊の顔に付け替え、自らの名前を刻み、顎の下に自らの立像を付けた³³。

さらに修復事業以外にも、トウトアंकアメン王はカルナク神殿内に新しい神殿を造営している(図12)。神殿はトウトアंकアメン王の治世には完成せず、後継者のアイ王が完成させた³⁴。しかし、これらの神殿の石材はその後ホルエムヘブ王の治世に破壊され、それぞれ第2塔門と第9塔門の詰め物の石材として転用されてしまった。

カルナク神殿内のアメン神像はことごとく破壊されたためにトウトアंकアメン王はこれらを修復するだけでなく、自分に似せた多くのアメン神像を製作させた³⁵。まさに「アメンの生きる似姿」というトウトアंकアメン王の名前の意味そのものが、神殿の各聖所に置かれたのである(図13)。

カルナク神殿の南にあるルクソール神殿では、トウトアंकアメン王は、アメンヘテプ3世が造営した大列柱廊の壁面にアメン神の大祭であるオペトの大祭の図を施させた³⁶。トウトア

31 Amer, A. A. M. A., 'Tutankhamun's decree for the chief treasurer Maya', *Revue d'Égyptologie* 36 (1985), pp. 17-20.

32 Schaden, O. J., 'Report on the 1978 season at Karnak', *Newsletter of the American Research Center in Egypt* 127, pp. 44-64.e

33 Trauneker, C., 'Aménophis IV et Néfertiti le Couple Royal d'Après les Talatates du IX^e Pylone de Karnak', *Bulletin de la Société Française d'Égyptologie* 107 (1986), pp. 20-22.

34 Schaden, O. J., *The God's Father Ay*, Ph.D. Dissertation, University of Minnesota, 1977; Johnson, W. R., *An Asiatic Battle Scene of Tuankhamun from Thebes*, Ph.D. Dissertation, University of Chicago, 1992.

35 Eaton-Krauss, M., *The Unknown Tutankhamun*, London, 2016.

36 Epigraphic Survey, *Festival Procession of Opet in the Colonnade Hall*, Volume 1, Oriental Institute of the University of Chicago, 1994; idem, *Festival Procession of Opet in the Colonnade Hall*, Volume 2, Oriental Institute of the University of Chicago, 1999.

ンクアメン王が装飾したオペトの大祭の図は、この大祭の一連のプロセスを示したものであり、トウトアンクアメン王の王権が信仰復興によりアメン神と深く関わっていることを示すプロパガンダとなったと思われる（図 14）。

テーベの西岸ではアマルナ時代に破壊を受けたアメンヘテプ 3 世の葬祭殿のアメン神等の図像の修復を行い、修復碑文を残している³⁷。

トウトアンクアメン王は、首都メンフィスにおいても活発に造営活動を行った。メンフィスでは「ネブケペルウラーの家」と呼ばれる神殿を建設したことが知られている³⁸。その正確な位置は不明であるが、碑文史料から知られている。その他にトウトアンクアメン王がメンフィスの神、プタハ神とセクメト女神を礼拝する図を描いたレリーフ・ブロックやスフィンクス像の頭部などがメンフィスから出土している³⁹。メンフィスのネクロポリスであるサッカラにおけるトウトアンクアメン王の活動としては、聖牛アピスの埋葬が挙げられよう⁴⁰。

ギザにおいては、トウトアンクアメン王はカフラー王の河岸神殿の西側に離宮施設を造っている。ここから出土した入口上部のまぐさ石にはトウトアンクアメン王とアネクエスエンアメン王妃の名前が刻まれ、トウトアンクアメン王の形容辞が「フウロン（大スフィンクスの意）に愛されたる者」と記されている⁴¹。先祖のトトメス 4 世が大スフィンクスの神託によって即位したことから、おそらく王家との関わりの深い場所と考えられたのであろう。

上エジプトとヌビアにおいて、トウトアンクアメン王はエルカブ、エレファンティネ島などでアクエンアテン王の治世に神像の破壊をうけた神殿の修復を行っている。現在のエジプトとスーダンの国境に近く、アブシンベルとブーヘンの中間に位置するファラスでは、トウトアンクアメン王は神として崇められた⁴²。ファラスはトウトアンクアメン王の治世において下ヌビアの行政の中心地だった町である。当時のファラスは「セヘテプネチェルウ（神々を満足させる者）」という名称で呼ばれているが、これはトウトアンクアメン王のホルス名である。ファラスには神となったトウトアンクアメン王の神殿、アメン神殿、ムウト神殿、ハトホル神殿が造られた。トウトアンクアメン王は、さらに南方の第 3 急湍に近いカワにもアメン神殿を建設

37 Bickel, S., *Tore und andere wiederverwendete Bauteile Amenophis 'III. Untersuchungen im Totentempel des Merenptah in Theben*, III, Stuttgart, 1987, 118, pl. 80.

38 Borchardt, L., *Das Grabdenkmal des Königs S'a3Hu-Re*, Band I, Der Bau, Leipzig, 1910, 124-5.

39 Habachi, L., 'Unknown or Little known Monuments of Tutankhamun and of his Viziers', in Ruffle, J., Gaballa, G. A., and Kitchen, K. A. (eds.), *Glimpse of Ancient Egypt in Honor of H. W. Fairman*, Warminster, 1979, pp. 32-41.

40 Mariette, A., *Le Sérapeum de Memphis par Auguste Mariette-Pacha*, Paris, 1882, pp. 125-6.

41 Van Dijk, J. and Eaton-Krauss, M. (eds.), 'Tutankhamun in Memphis', *Mitteilungen Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 42 (1986), pp. 36-38.

42 Karkowski, J., *Faras V: The Pharaonic Inscriptions from Faras*, Warszawa, 1981.

し、ここでもトウトアムン王は神格化され、アメン・ラー神の姿で崇拝された⁴³。その他出土不明であるが、トウトアムン王の名前を記したレリーフ・ブロックや石碑が多数出土している。このようにトウトアムン王は、約10年という短い治世の間に勢力的に建築、修復活動を展開し、復興事業を進めたことが明らかとなっている。

10 トウトアムン王の側近：アイとホルエムヘブ

トウトアムン王の時代は、アマルナ時代からの有力貴族によって支えられていたと言っても過言ではない。サッカラの乳母マヤの墓にトウトアムン王に仕えた有力貴族の姿が描かれている(図15)⁴⁴。しかも、その先頭には支配を意味するヘカの形をした王笏を持つ人物と戦闘用の斧を持つ人物が、通常王に次いで重要な人物とされる南北の宰相の前に位置している。他の図像の類例から判断すると、王笏を持つ人物は、「神の父」アイであり、戦闘用の斧を持つ人物は、ホルエムヘブであろう。すなわち、この2人がトウトアムン王の治世の実質的な権力者であったことを示しているのである。このことはトウトアムン王の治世の特殊性を示していると言える。つまり、トウトアムン王の時代は、実権は王ではなくアイやホルエムヘブを始めとする有力貴族の手中にあったと考えられる。

以下では、トウトアムン王の治世に実権を握った二人の人物、アイとホルエムヘブについて解説する⁴⁵。

8～9歳頃に即位したトウトアムンとアムンエスエンアムン王妃の後見人は、アクエンアテン王の後見人でもあった老臣アイであった。アイは、王家との縁が深いアクミーム出身の人物であり、おそらくアメンヘテプ三世の王妃でアクエンアテン王の母であるティイ王妃と血縁あるいは地縁で繋がっていたと思われる。アイは、「弓兵長」と「馬の監督官」という称号を持っていることから、本来は軍人であったとみられるが、最も重要な称号は、「神の父」である。「神の父」という称号は、王の最も重要な側近という意味であったと考えられている。おそらく、アイがこの称号を得ることができたのは、アイの妻ティがネフェルトイティ王妃の乳母であったことが要因の一つであったと考えることができるが、それだけの理由でアイが高位についたというのは考えがたい。いずれにせよ、アイは、アクエンアテン王の治世から「神の父」という称号を持ち、王の最も重要な側近として王家に仕え、侍従のような立場であったと考えられる。

図像資料にもトウトアムン王の治世におけるアイの役割を示唆するものがある。王家

43 Macadam, M. F. L., *The Temple of Kawa*, I, London, 1949 and II, London, 1955.

44 Zivie, A., *La Tombe de Maïä: mère nourricière du roi Toutânkhamon et grande du harem*, Paris, 2009, pl. 22.

45 Kawai, N., 'Ay versus Horemheb: The Political Situation in the Late Eighteenth Dynasty Revisted', *Journal of Egyptian History*, vol. 3. 2 (2010), pp. 261-292.

の谷第 58 号墓から出土した金箔の装飾品には、異民族を打ち据えるトウトアंकアメン王と、王を見守るアंकエスエンアメン王妃の前に立ち敬意を表すアイの姿が描かれている。これは、アイが王と王妃の指南役であることを示すプロパガンダと考えられる。さらに、トウトアंकアメン王がカルナクに造営した記念神殿では、アイは神々に対して儀式を行うトウトアंकアメン王の背後に頻りに描かれており、王の後見人としてしばしば王の祭儀に関与していたことが推測される（図 16）。おそらくアイは、トウトアंकアメン王の祭儀に関与していることを公に示すことで自らの立場を正当化していたと思われる。トウトアंकアメン王の治世において、アイはアテン信仰から伝統的な多神教への帰依を示す称号「9 柱神の祝祭の指揮者」という称号を得る。王家谷第 58 号墓から出土した金箔片の銘文にはアイが新たに得た称号が記されている。注目すべきことに、これらの称号には以前アイが所持していなかった、行政能力を示す「宰相」が含まれている。トウトアंकアメン王の治世には南北の宰相の名前も確認されているので、アイの宰相としての具体的な役割については明らかではないが、アイが以前のような王宮の侍従のような立場からさらに踏み込んで行政を担当する地位について示すと解釈できる。形容辞の「マートを遂行する者 (*iry m3t*)」は、宰相の法的な役割を示すと同時に王権の本質的な役割を表現するものである。

「神の手と結合する者 (*dmd drt ntr*)」という形容辞の「神の手 (*drt ntr*)」は、第 18 王朝において「アメン神の妻」の称号を持つ王家の女性の付帯称号に用いられることから、これはアイと王家の女性との緊密な関係を示したものであると考えられる。しかし、アイとの関わりが深かったと思われるネフェルトイティ王妃、メリトアテン王妃、アंकエスエンアメン王妃の称号には「神の手」の称号は認められない。したがって、「神の手と結合する者」とは、アイの最も重要な称号である王と王妃の後見人としての「神の父」の役割を表したものであるとも解釈できる。おそらく、アイはアクエンアテン王の治世より王家と最も密接な関係を持つ貴族であったので、トウトアंकアメン王の死後後継者として即位したのであろう。このことは、また未亡人となったアंकエスエンアメン王妃にとっても最も自然な流れであったと考えられる。

トウトアंकアメン王の治世に政治の実権を握っていたのは大將軍ホルエムヘブである。ホルエムヘブはアイと異なり、もともと王家と密接な関係にあった人物ではない。彼の素性については、中部エジプトの地方都市出身であることが知られているにすぎない。ホルエムヘブの妻、ムトネジェムトについては、かつてネフェルトイティ王妃の妹であるとされ、このことが後のホルエムヘブの即位の正統性に大きく影響したと推測されていたが、ホルエムヘブの妻のムトネジェムトとネフェルトイティ王妃の妹は同一人物ではない。ネフェルトイティ王妃の妹の名前はムトベネレトである。

ホルエムヘブはおそらくアクエンアテン王の治世にパアテンエムヘブと名乗っていた軍人と同一人物であると考えられる。パアテンエムヘブは、アクエンアテン王の治世に「二国の主の將軍」という称号を持っており、アマルナで王の護衛にあたった軍人たちの指揮官としてすでに頭角を現していたと考えられる。

ホルエムヘブは、トウトアंकアメン王の治世において、王に代わる軍事・行政の最高責任

者であった。ホルエムヘブの主要な称号は「大將軍」、「王の外交使節」で、元々軍事・外交を司っていたが、それだけでなく、トウトアंकアメン王の「摂政」および「国王代理」として、通常は王の次の高位である二人の宰相を凌駕する地位にあった。サッカラのホルエムヘブの墓は、メンフィス・ネクロポリスにおける新王国時代の貴族墓の中で最大規模であり、ホルエムヘブの傑出した地位を示すものである。

ホルエムヘブの墓の壁面レリーフには、シリアとヌビアの軍事遠征に成功し、トウトアंकアメン王とアंकエスエンアメン王妃に讃えられ、金の胸飾りを下賜される図や、「王の外交使節」としてトウトアंकアメン王と外国の支配者との間の仲介役をしている場面が表現されている（図 17）。同時代の他の高官の墓にもホルエムヘブの地位を示す図像資料がある。例えば、トウトアंकアメン王治世のプタハ大司祭、プタハエムハト・テイの墓のレリーフには被葬者の死を悲しむ高官たちの描写があり、その先頭に立つ人物は、名前が記されていないものの、「王の書記」、「摂政」、「大將軍」の3つの称号を持っているので、疑いなくホルエムヘブである。このように少年王トウトアंकアメンの背後でホルエムヘブは絶大な権力を揮っていたのである。

ヤコブス・ファンダイクやウイリアム・マーネインは、近年トウトアंकアメン王が在位中にホルエムヘブを「後継者」に指名したとの見解を主張している⁴⁶。確かにあらゆる資料を見る限り、ホルエムヘブはトウトアंकアメン王の治世において極めて傑出した地位にあったことは事実であるが、彼がトウトアंकアメン王から在位中に後継者として指名されていたかは疑問である。第18王朝の王家の直系であるトウトアंकアメン王が即位後にホルエムヘブを「皇太子」に任命したとすれば、トウトアंकアメン王自らが王家の断絶を認めていたことになり、そのような推定は考えがたい。

ホルエムヘブはアマルナ時代からポスト・アマルナ時代にかけての混乱期に、軍の統率者として王の信頼に与り、シリア北部にあった国境線を護るだけでなく、トウトアंकアメン王の代理としてほとんど全ての行政部門を司っていた。しかし、王家との血縁関係もなく、王位継承という点では条件が整っていたわけではなかった。

したがって、近年指摘されているようなホルエムヘブが「皇太子」としてトウトアंकアメン王の後継者であったのではなく、出自の点、王家との関係から考慮してもアイが後継者になるのが自然であったと考えられる。アイとホルエムヘブは、トウトアंकアメン王の治世において共に影の実力者であったが、二人の人物背景や役割は異なっていたのであろう。

46 Van Dijk, J., 'Horemheb and the Struggle for the Throne of Tutankhamun', *Bulletin of the Australian Centre for Egyptology* 7 (1996), pp. 29-42; Murnane, W. J., 'The Return to Orthodoxy', in Freed *et al.* (eds.), *Pharaohs of the Sun: Akhenaten-Nefertiti-Tutankhamun*, Boston, 1999, pp. 177-185.

11 まとめ

以上、トウトアंकアメン王の時代のエジプトの概要を述べたが、最後にトウトアंकアメン王の治世の特徴をいくつか指摘し、本稿のまとめとしたい。

まず、アメン神を中心とする信仰復興についてはグラフィトやトウトアंकアメン王が再利用した副葬品から、すでにネフェルネフェルウアテン女王の治世に着手されたと考えられるが、トウトアंक（ウ）アテン王子は、トウトアंकアテン王として即位したことから、アメン信仰の復興は始められていたとしても依然としてアテン信仰が存在し、これらの二柱の神は等しく国家神として崇拝されたと推測される。しかし、伝統的なアメン神を中心とする多神教への揺り戻しが強かったため、治世第3年頃までにトウトアंकアメンに改名したのであろう。信仰復興については、「信仰復興碑」にトウトアंकアメン王の治世第4年頃までの事業が記されているが、テーベを中心とするエジプト各地の神殿では、大規模な修復および増築が推進されたことが明らかとなった。神殿の建造物のみならず、彫像の修復や製作が勢力的に進められた証拠が残されている。

トウトアंकアメン王の治世に、宰相よりも凌駕する権力を持っていたのはアイとホルエムヘブであった。そして、トウトアंकアメン王の治世は、これらの傑出した貴族を中心とした集団指導体制であったと思われる。信仰復興によりアクエンアテン王の治世に富が集中していた王権は、各地の神殿を再開し、新たに豪族から神官を任命することで富を再分配することになり、弱体化の途を辿った。アイは、アクエンアテン王の治世に続いて、トウトアंकアメン王の治世においても王宮にて王の後見人としての地位を築いたとみられる。ホルエムヘブは、アクエンアテン王の治世より軍人として頭角を現し、トウトアंकアメン王の治世では、大將軍という軍の最高司令官としての役割だけでなく、摂政および国王代理として行政のあらゆる部門を統括した実質的な権力者であった。しかし、出自と王家との関係についてはアイの方が優っていたため、トウトアंकアメン王の死後、アイが王位に就くことになったと考えられる。

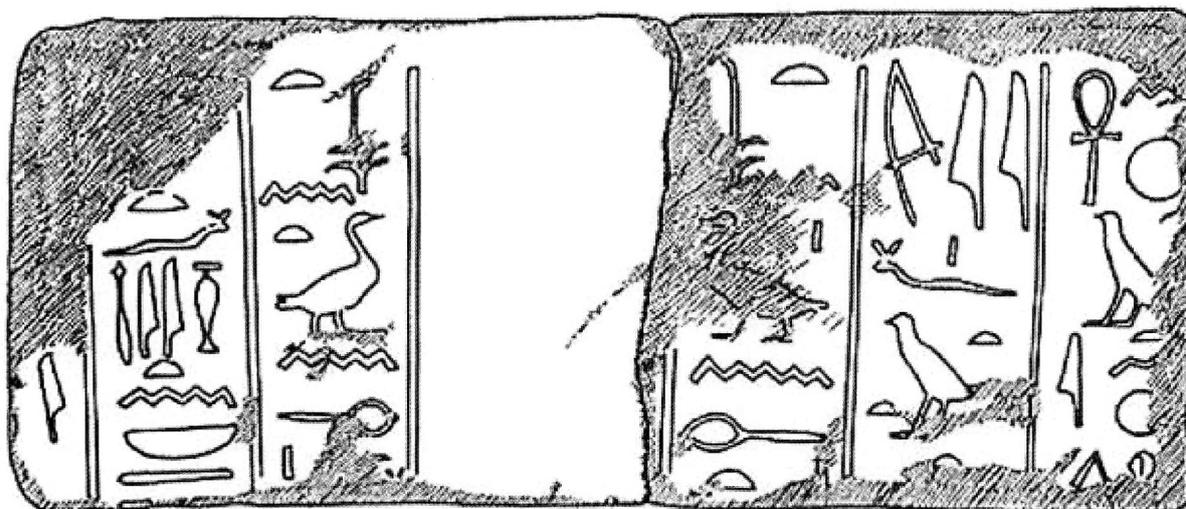


図1 ヘルモポリス・ブロック (56-VIII A+831-VIII C) (出典 Gabolde 2002, fig. 7)

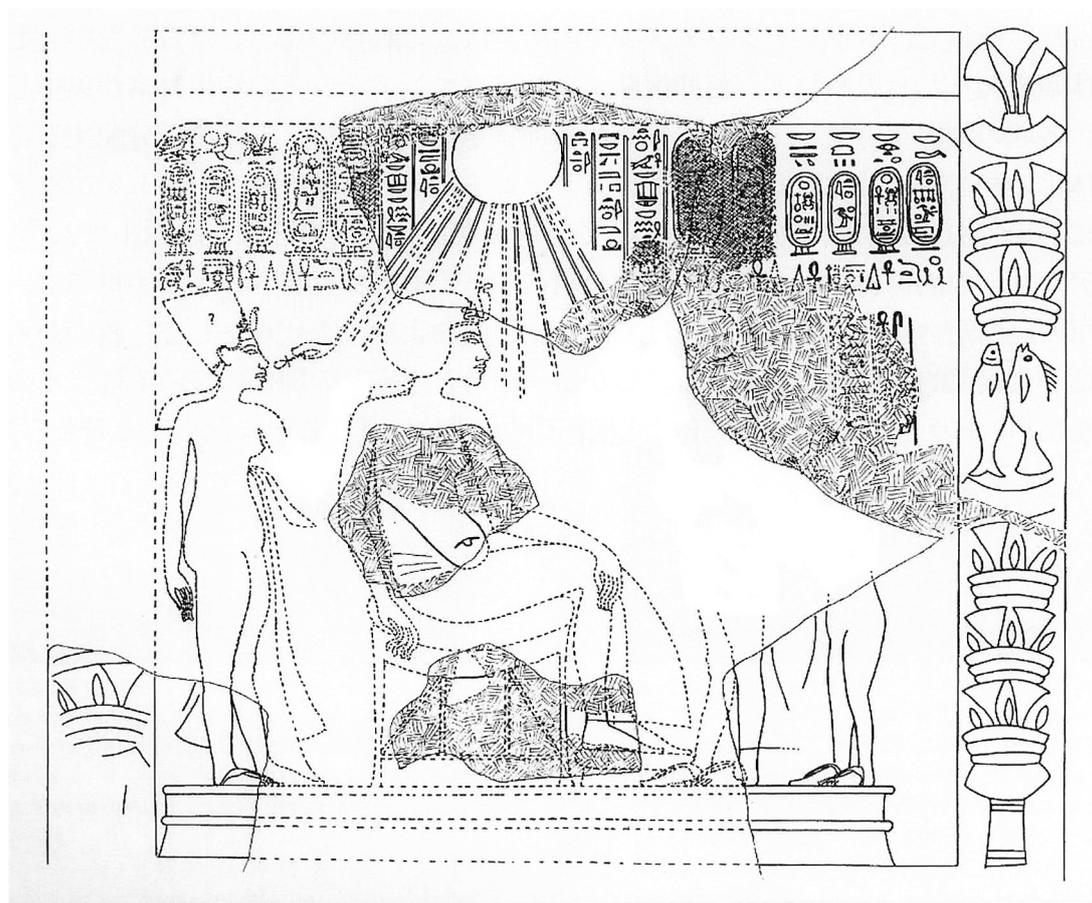


図2 「共同統治ステラ」(UC410+Cairo JdE64959) (出典 Gabolde 1998, pl. XXIV, a, 破線部分は Gabolde の推定復元)

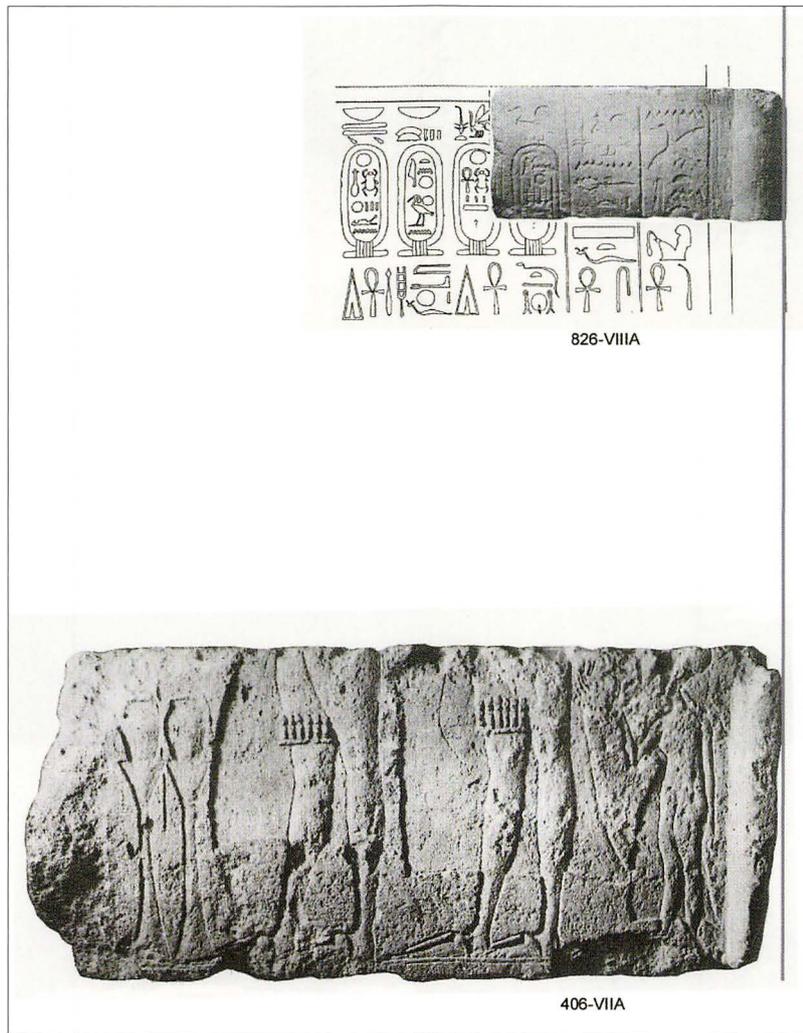


図3 アマルナ時代最末期の王家の家族の図像（左からアクエンアテン王、ネフェルネフェルウアテン女王、アンクエスエンパアテン王女）(406-VIIA+826-VIIIA)（出典 Roeder 1969, pl. 10, 16 を筆者が推定復元）

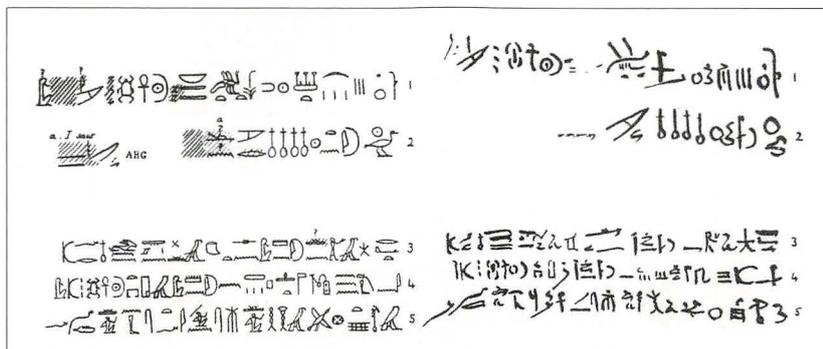


図4 ネフェルネフェルウアテン女王の治世第3年の日付のグラフィト（テーベ西岸、パイリの墓(TT139)）（出典 Gardiner 1928, fig. 1）



図5 トウトアンクアメン王に再利用されたネフェルネフェルウアテン女王の胸飾 (Carter 261p1)。トウトアンクアメン王墓出土、カイロ・エジプト博物館蔵 (筆者撮影)



図6 トウトアンクアメン王の黄金の玉座の背板 (筆者撮影)



図7 トウトアンクアメン王の「信仰復興碑」（筆者撮影）



図8 トウトアンクアテン王のステラ、ベルリン・エジプト博物館蔵（© Ägyptisches Museum, Berlin）

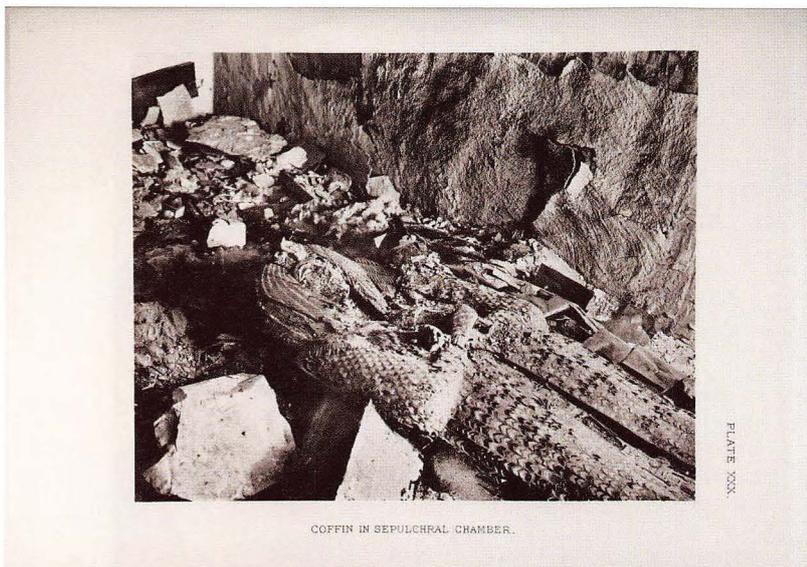


図9 王家の谷第55号墓木棺出土状況（出典 Davis 1910, Pl. XXX）

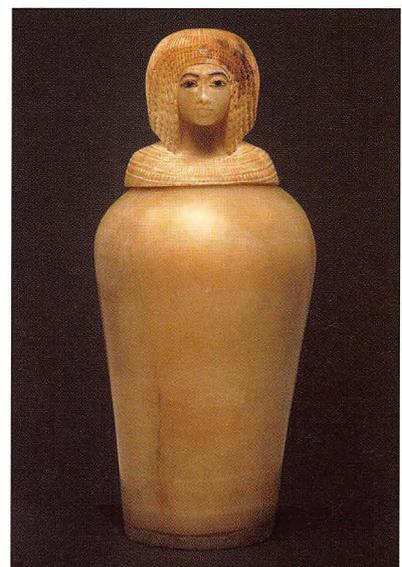


図10 王家の谷第55号墓出土のカノポス容器（©Metropolitan Museum of Art, New York）

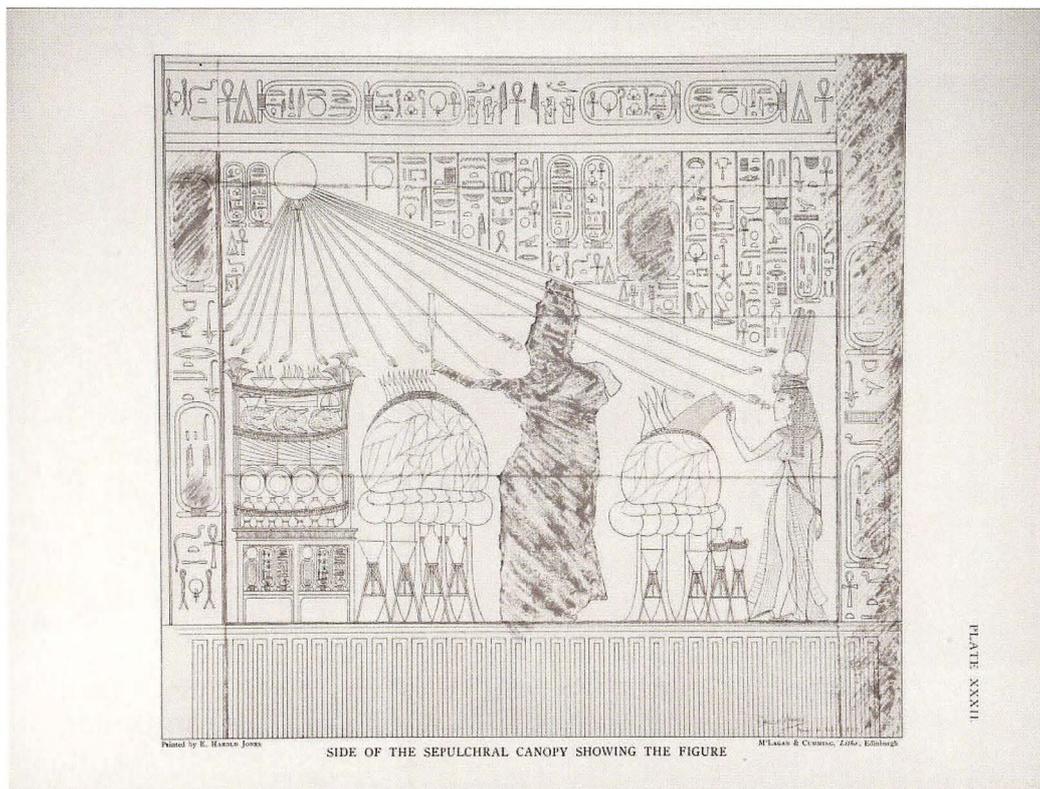


図 11 ティイ王妃の金張りの厨子（出典 Davis 1910）



図 12 トウトアンクアメン王の神殿のレリーフ・ブロック、カルナク出土（©CFEETK）

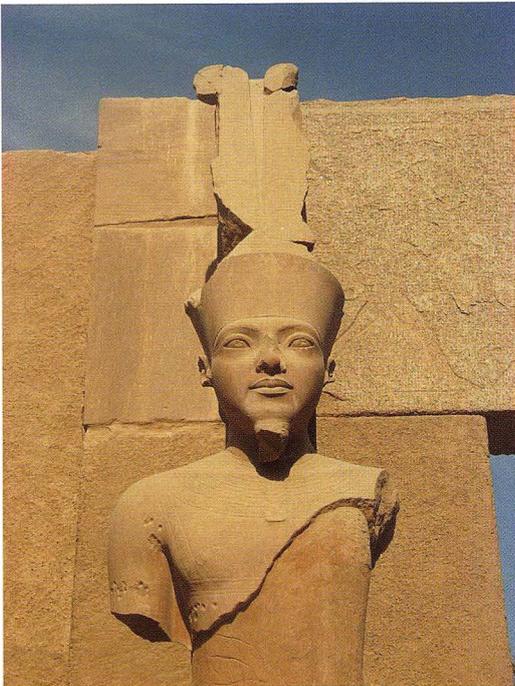


図13 トウトアンクアメン王の容貌をしたアメン神像、カルナク、アメン大神殿（筆者撮影）

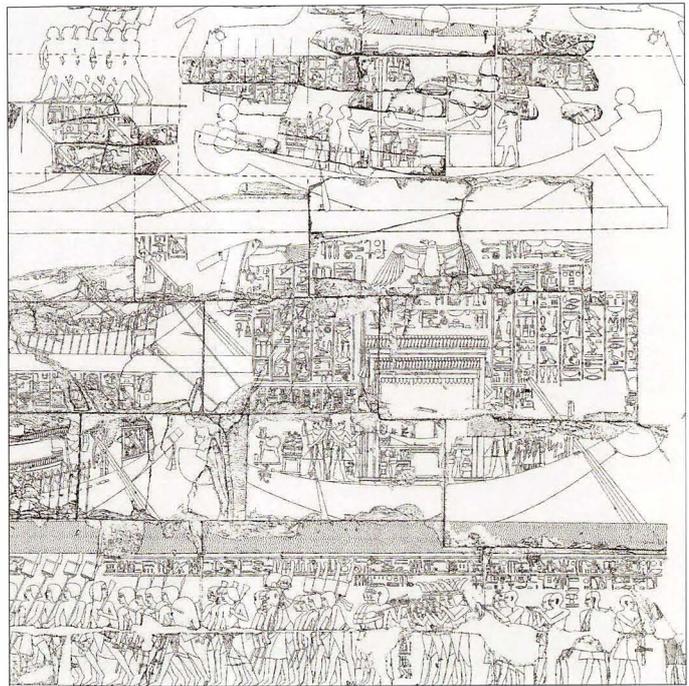


図14 オペト祭の図、ルクソール神殿、大列柱廊（出典 Epigraphic Survey 1994, pl. 68）



図15 トウトアンクアメン王の乳母マヤの墓に描かれたトウトアンクアメン王の高官 (Zivie 2009, Fig. 11, pl. 22)

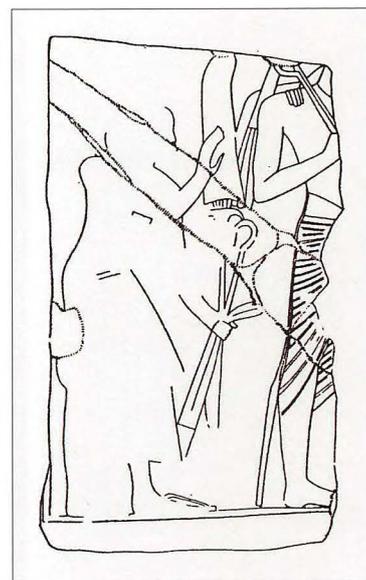


図16 トウトアンクアメン王の背後に描かれたアイ、トウトアンクアメン王の神殿、カルナク出土（出典 Saad, R. 'Fragments d'un monument de Toutânkhamon retrouvés dans le IXe pylon de Karnak', *Karnak V* (1975), pp. 93-109.



図 17-1 トウトアンクアメン王から首飾りを授かるホルエムヘブ、サッカラ、ホルエムヘブ墓出土、ライデン博物館蔵（筆者撮影）

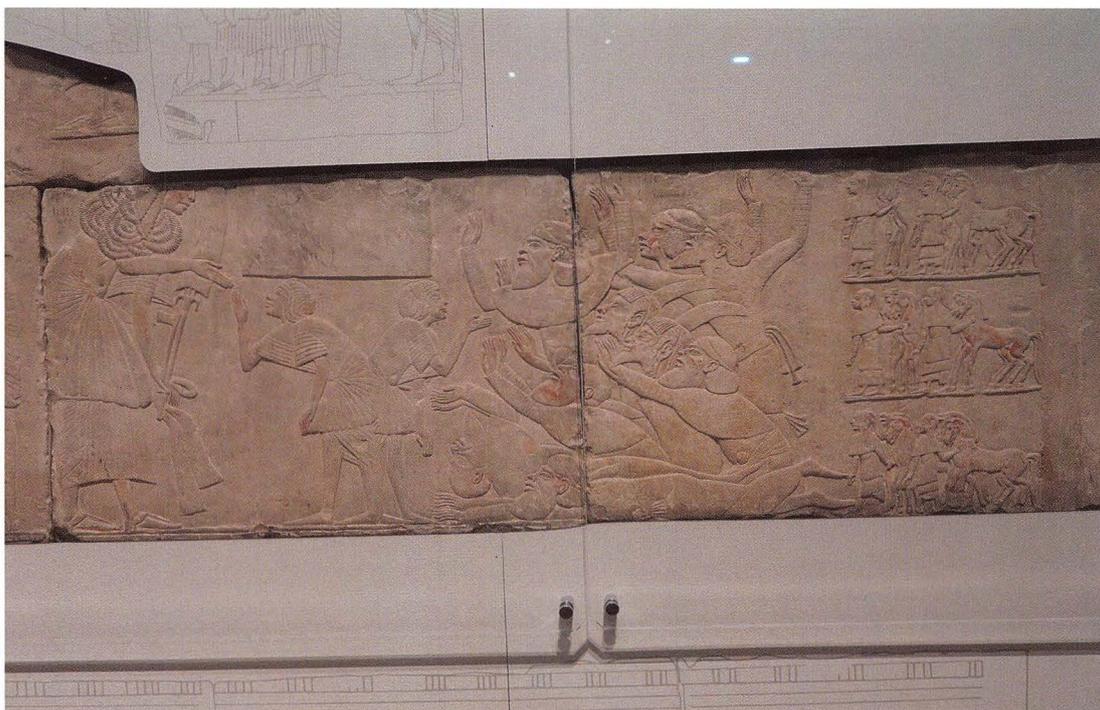


図 17-2 トウトアンクアメン王と異国の首長との媒介の役割をするホルエムヘブ、サッカラ、ホルエムヘブ墓出土、ライデン博物館蔵（筆者撮影）